

与謝野晶子訳

源氏物語 夕霧二卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

夕霧二

紫式部

與謝野晶子訳

歸りこし都の家に音無しの滝はおちね

ど涙流るる

(晶子)

恋しさのおさえられない大将はまたも小野^{おの}の山莊に宮をお訪^{たず}ね
しようとした。四十九日の忌^{いみ}も過ぎしてから静かに事の運ぶよう

にするのがいいのであるとも知っているのであるが、それまでに
まだあまりに時日があり過ぎる、もう噂を恐れる必要もない、こ
の際ほどの男性でも取る方法で進みさえすれば成り立ってしまう
結合であろうとこんな気になっているのであるから、夫人の嫉妬
も眼中に置かなかった。宮のお心はまだ自分へ傾くことはなくて
も、「一夜ばかりの」といって長い契りを望んだ御息所の手紙が
自分の所にある以上は、もうこの運命からお脱しになることはで
きないはずであると恃むところがあつた。九月の十幾日であつ
て、野山の色はあさはかな人間をさえもしみじみと悲しませてい
るころであつた。山おろしに木の葉も峰の葛の葉も争って立てる

音の中から、僧の念仏の声だけが聞こえる山莊の内には人げも少なく、蕭条とした庭の垣のすぐ外には鹿が出て来たりして、山の田に百姓の鳴らす鳴子の音にも逃げずに、黄になった稲の中で啼く声にも愁いがあるようであつた。滝の水は物思いをする人に威嚇を与えるようにもとどろいていた。叢の中の虫だけが鳴き弱つた音で悲しみを訴えている。枯れた草の中から竜胆が悠長に出て咲いているのが寒そうであることなども皆このごろの景色として珍しくはないのであるが、折と所とが人を寂しがらせ、悲しからせるのであつた。

夕霧は例の西の妻戸の前で中へものを言い入れたのであるが、

そのまま立って物思わしそうにあたりをながめていた。柔らかな
気のする程度に着馴^ならした直衣^{のうし}の下に濃い紫のきれいな擣^{うち}目の服
が重なって、もう光の弱った夕日が無遠慮にさしてくるのを、ま
ぶしように、そしてわざとらしくなく扇をかざして避けている手
つきは女にこれだけの美しさがあればよいと思われるほどで、そ
れでさえこうはゆかぬものをなどと思つて女房たちはのぞいてい
た。寂しい人たちにとってはよい慰安になるであろうと思われる
美しい様子で、特に名ざして少将を呼び出した。狭い縁側ではあ
るが、他の女がまたその後ろに聞いているかもしれない不安がある
ために、声高には話しえない大将であつた。

「もう少し近くへ寄ってください。好意を持ってくれませんか、この遠方へまで御訪問して来る私の誠意を認めてくださったら、最も親密なお取り扱いがあつてしかるべきだと思いますよ。霧がとても深くおりてきますよ」

と言つて、ちよつと山のほうをながめてから大將がぜひもつと近くへ来てくれと言うので、余儀なく鈍色にびの几帳きちようを簾すだれから少し押し出すほどにして、裾すそを細く巻くようにした少將は近くへ身を置いた。この人は大和守やまとのかみの妹で、御息所みやすどころの姪めいであるというほかにも、子供の時から御息所のそばで世話になつていた人であつたから喪服の色は濃かつた。黒を重ねた上に黒の小袿こうちぎを着ていた。

「御息所のお亡れになつたのを悲しむことと宮様のいつまでも御冷淡であらせられるのをお恨みするのが私の心の全部になつて、ほかのことは頭にありませんから、だれからも私は怪しまれてしかたがありません。もう私に忍耐の力というものがなくなりましてよ」

これを初めにして、夕霧はいろいろと恋の苦しみを訴えた。御息所の最後の手紙に書かれてあつたことも言つて非常に泣く。少将もまして非常に泣く。

「その時のことでございますがね、あなた様がおいでにならぬばかりか、御自身のお返事もおもらいになれないまままで暗くなつて

まいりますのに悲観をあそばしましてとうとう意識をお失いになりましたのに物怪もののけがつけこんで、そのまま蘇生そせいがおできにならなかったのだと私は拝見いたしました。以前の御不幸のございました時に、もうそんなふうにおなりになるのでないかと私どもがお案じいたしましたようなことがおりおりございましたが、宮様がお悲しみになってめいっておいであそばすのをおなだめになりたいとお思になるお心の強さから、御健康をお持ち直しになったのでございます。あなた様についての御息所のこのお悲しみ方を宮様はただ呆然ぼうぜんとして見ておいでになりました」

あきらめられぬようにこんなことを少将は言っていて、まだ頭

はかなり混乱しているふうであつた。

「そうではあつても、宮様はもう常態にお復しになつてしかるべきだと思う。私に対してあまりな知らず顔をお作りになるのは、思いやりのないことではありませんか。もつたいないことです。が、孤独におなりになつた宮様にだれがお力になるとお思いになるのだろう。法皇様はいつさい塵界じんかいと交渉を絶つておいでになる御生活ぶりですから、御相談事などは申し上げられないでしょう。あなたがたが熱心になつて宮様の私に対する御冷酷さをお改めになるようによくお話し申し上げてください。皆宿命があつて、一生孤独でいようとあそばしても、そうなつて行かないとい

うこともお話し申すといい。人生が望みどおりに皆なるものであれば、この悲しい死別はなされなくてもよかったわけではありませんか」

などと夕霧は多く言うのであるが、少将は返事もできずに歎息ばかりしていた。鹿がひどく啼くのを聞いていて、「われ劣らめや」(秋なれば山とよむまで啼く鹿にわれ劣らめや独り寝る夜)と吐息をついたあとで、

里遠み小野の篠原分けて来てわれもしかこそ声も惜しまね

と大将が言うと、

ふぢ衣露けき秋の山人は鹿のなく音ねに音ねをぞ添へつる

少将のこの返歌はよろしくもないが、低く忍んで言う声こわづかい
などを優美に感じる夕霧であつた。宮へいろいろとお取り次ぎも
させたが、

「この悲しみの中から自分を取りもどす日がございましたら、始
終お心にかけてお尋ねくださいますお礼も申し上げられるかと思
います」

と礼儀としてだけのことより宮からはお返辞がない。大將は失望して歎なげきながら帰って行くのであった。途中も車の中から身にしむ秋の終わりがたの空をながめていると、十三日の月が出て暗い気持ちなどにはふさわしくないはなやかな光を地上に投げかけた。それにも誘われて一条の宮の前で車をしばらくとどめさせた。以前よりもまた荒れた気のお邸やしきであった。南側の土塀どべいのくずれた所から中をのぞくと、大きな建物の戸は皆おろされてあつて人影も見えない。月だけが前の流れに浮かんでいるのを見て、柏木かしわぎがよくここで音楽の遊びなどをしたその当時のことが思ひ出された。

見し人の影すみはてぬ池水にひとり宿守る秋の夜の月

こう口ずさみながら家へ帰って来た大将は、そのまま縁に近い座敷で月にながめ入りながら恋人の冷たさばかりを歎いていた。

「あんなふうにしていらっしやることは以前になかったことですね。およしになればいいのに」

と言って女房らは譏った。夫人は痛切に良人のこの変わりようを悲しんでいた。これは心がほかへ飛んで行っているという状態なのであろう、そうしたことに馴らされた六条院の夫人たちを何かといえはよい例に引いて、自分をがさつな、思いやりのない女

のように言う良人は無理である、自分も結婚した初めからそう馴らされて来たのであったなら、穏健なあきらめができていて、こんな時の辛抱しんぼうもしよいに違いない、珍しく忠実な良人を持つ妻として親兄弟をはじめとして世間からあやかり者のように言われて来た自分が、最後にみじめな捨てられた女になるのであるであろうかと歎いているのである。夜も明けがた近くなるのであるが、夫婦はどちらも離れた気持ちで身をそむけたまま何を言おうともしなかつた。

起きるとまたすぐに、朝霧の晴れ間も待たれぬようにして大将は山荘への手紙に筆を取っていた。不愉快に思いながらも夫人は

もういつかのように奪おうとはしなかった。書いてしばらくそれをながめながら読んで見ているのが、低い声ではあったが、一部だけは夫人の耳にもはいつて来た。

いつとかは驚かすべきあけぬ夜の夢さめてとか言ひし一言

「上よりおつる」（いかにしていかによからん小野山の上よりおつる音無しの滝）と書かれたものらしい。巻いて上包みをしたあとでも「いかによからん」などと夕霧は口にしていた。侍を呼んで手紙の使いはすぐに小野へ出された。内容の全部はよくわから

なかったが、返事だけは手に入れて読みたいものである、それによつて真相が明らかになるであらうと夫人は思っていた。

朝おそくなつてから小野の返事が来た。濃い紫色の、堅苦しい紙へ例の少将が書いたものであつた。今日もまた自分たちの力で宮をお動かしかしすることのできなかつたことが書かれてあつて、

お気の毒に存じますものですから、あなた様のお手紙へむだ書きをあそばしたのを盗んでまいりました。

と書いて、中へその所だけを破つたのが入れてあつた。読んでだけはもらえたのであるということであれしくなる大将の心もみじめなものである。むだ書きふうにお書きになつたお歌は、骨を

折って読んでみると、

朝夕に泣く音を立つる小野山はたえぬ涙や音無しの滝

と解すべきものらしい。また寂しいお心に合いそうな古歌などの書かれてある宮のお字は美しかった。他人のことで、こんなことを夢中になるまでの関心をもって楽しんだり、悲しんだりしているのを、齒がゆく病的なことに思っていたが、自分のことになると恋する心は堪えがたいものである、どうしてこうまでになったのかと反省をしようとするのであるが、それもできないことで

あつた。

六条院も大将の恋愛問題をお聞きになって、この人がなんらの浮いたこともせず、批難のしようもない堅実な人物であることに満足しておいでになって、御自身の青春時代に好色な評判を多少お取りになった不面目をこの人がつぐなってくれるもののように思っておいでになったことが裏切られていくような寂しさをお感じになった。この事件の気の毒な影響から双方で犠牲を払う結果になるであろう、全然関係のないところの女性ではなくて、妻の兄の未亡人の宮との問題であるから、舅しゅうとの大臣などもどう思うことであろう、それほどの思慮を持たないのではあるまいが、宿

命というものから人はのがれられずに起こってきたことであるう、ともかくも自分の干渉すべきことでないと院はお考えになった。結局双方とも婦人の損になることで気の毒であると歎いておいでになるのであった。御自身の経験されたことに照らして見、また大将のこの現状によって、亡^なきのちの世が不安になったことを紫夫人にお言いになると女王^{によおう}は顔を赤くして自分があとに残らねばならぬほど、早くこの世から去っておしまいになる心でおいでになるのであろうかと恨めしく思うふうであつた。

「女ほど窮屈なものはありませんね。心の惹^ひかれることも、恋しい感情も皆おさえて知らぬふうをしておとなしくしていなければ

ならないのでは生きがいもなし、人生の退屈さと悲哀とを紛らす
ことができないではありませんか。そうかといって感情に乏しい
女になっては無価値だし、どうしてこんなふうに育ったのかと親
さえも軽蔑けいべつしたくなりますからね。ただ心でだけ思っ、お坊様
が気の毒がる無言太子のようになって、細かな感情も動きながら
黙っていたければならない人にするのも無慈悲な親になる。こう
であればああであり、それであればこうになる、どうして中庸を
得るようにすればいいかと、そんなことを私が考えるのも、他の
女性のためではなく女にょいち一の宮みやを完全な女性にしたいからですよ」
と院は言っておいでになった。

夕霧が六条院へ来た時に、実状を知りたく思召す心から、院

が、

「御息所みやすどころの忌いみがもう済んだだろうね。時はずんずんとたつからね。私が遁世とんせいの望みを持ち始めた時からもう三十年たっている。味気ないことだ。夕べの露にも異ならない命を持って安んじていられるわけではないのだからね。どうかして髪を剃そり落としたいと望みながらのんきなふうを装っている。これはいけないことだね」

こんな話をおしかけになった。

「不幸ばかりで、もうこの世に未練はなかろうと思われます人で

も、さて遁世はなかなかできないものらしいのでございますから、あなた様などは御無理もございません」

などと言つて、また大將は、

「御息所の四十九日の仏事のことなども大和守^{やまとのかみ}一人の手でやっております。気の毒なことでございます。よい身寄りのない人は自身についた幸福だけで生きている間はよろしゅうございますが、死んだあとになってみますと気の毒なものです」

とも言つた。

「御息所の仏事は院からお世話をあそばさだらうよ。女^{にょに}二の宮^{みや}はどんなに悲しんでおいでになることだらう。その当時はよくわ

からなかったが、近年になって事に触れて私の見たところではあの御息所は相当にりっぱな人らしい。院の後宮の才女には違いなかった。そんな人の亡くな^なっていくことは惜しい。生きておればよいと思う人がそんなふうに皆死んでゆくではないか。院もお悲しみになったということだ。あの宮さんはここに来ておられる宮さんに次いで御愛子だったのだよ。きつとごりっぱだろう」

「さあ宮様はどんな方でございますか。御息所は無難な女性と見受けました。そう親密につきあっていたのではございませんが、しかし、何でもない時に人格の片影は見えるものでございますか
らね」

などと言って、女二の宮のことを話題にせず大將は素知らぬふうを見せているのである。これほど強い心でしている恋は、親の言葉くらいで思いとどまらせえられるものでない、用いない忠告を賢げに言うのもおもしろいことではないとお思いになって、院は何の勧告をもあそばさなかった。

大將は御息所の法事をするのにあらゆる尽力をしていた。こんなことはすぐに評判になるもので、太政大臣家へも聞こえていった。不都合な話であると女性の側の悪いようにそこでは言われておいでになる宮がお気の毒である。法事の当日は昔の縁故で大臣家の子息たちも参会した。派手な誦經はでずきようの寄付が大臣からもあつ

た。寄付はまだほかからも多く来た。競争的にこうしたことをするのが今日の流行である。

宮はこのまま小野の山荘で遁世とんせいの身になっておしまいになる志望がおりになったのであるが、御寺みでらの院にこのことをお報じ申し上げた人があつて、

「そんなことはよろしくない。皆がいろいろな変わった境遇にすることも望ましいことではないが、保護者のない者が尼になったために、かえって浮いた名を立てられることがあつたり、俗でいる以上に煩惱を作らなければならないことができたりしては、この世の幸福も未来の幸福も共に無にしてしまうことになる。自分

が僧になっている上に、三の宮が出家をしている。今また二の宮が同じことをしては、子孫の絶えていく一家と見られるのも、世の中を捨てた自分にとってはかまわないことであるが、必ずしもまた今競って出家は実現するに及ばないことだということは自分にもできる。不幸な時にこの世を捨てることをするのは見苦しいものである。自然に悟りができてくる時節を待って、冷静に判断をしてしなければならぬことです」

こんな意味のことをたびたび御忠告になった。大将との恋愛事件がお耳にはいつていたのである。大将の愛が十分でないために悲観して尼になったと宮がお言われになることを院はおあやぶみ

になるのであつた。そうとはお思いになつても公然大將の夫人になつておしまいになることを姫宮の完全な幸福とお認めになることもおできにならないのであるが、その問題に触れていつては宮が羞恥しゆうちに堪えられないであらうと思召おほしめすとかawaiiそうなお気持ちおほしめがして、せめてこの際は自分だけでも知らぬ顔をしていてやりたいと思召した。

大將も立てられる噂うわさに言いわけをしてきたこれまでの態度はもう改めるほうがよい時期になつたと思ひ、女二の宮が結婚を御承諾になるのを待つことはせずに、御息所の希望したことであつたからというように世間へは思わせることにして、この場合はしか

たがないから故人にちよつとした責任を負わせることくらい許してもらうことにして、いつから始まったということをあいまいにして夫婦になろう、今さら恋の涙のありたけを流して、宮のお心を動かそうと努めるのも自分に似合わしくないことであると思つて、山莊を引き上げて一条の邸^{やしき}へお移りになる日をおよそいつとすることもこちらできめた夕霧は、大和守を呼んで、大将夫人としての宮のお歸りになる儀式等についての設けを命じたのであつた。邸の修理をさせ、勝ち気な御息所が旧態を保たせていたとはいふものの、行き届かない所のあつた家の中を、みがき出したように美しくして、壁代^{かべしろ}、屏風^{びょうぶ}、几帳^{きちょう}、帳台、昼の座席なども最も

高雅な、洗練された趣味で製作させるように命じてあつた。

当日は夕霧自身が一条に来ていて、車や前駆の役を勤める人たちを山荘へ迎えに出した。宮はどうしても帰らぬと言つておいでになるのを、女房たちは百方おなだめしていたし、大和守も意見を申し上げた。

「その仰せは承ることができません。お一人きりのお心細い御境遇が悲しく存ぜられまして、御葬送以来ただ今までは、私としてお尽くしいたしうるだけのことはいたしてまいりました。しかし私は地方長官でございますから、お預かりしております国の用がうちやうてはおけませんので、近くまた大和へまいらねばならな

いのでございます。あなた様のただ今からのお世話をだれに頼んでまいってよいという人もございせんから、どうすればよいかと思っております場合に左大將が力を入れてくださるのでございますから、あなた様御一身について考えますれば、御再婚をあそばすことをこれが最上のこととは申されませんのでございますが、しかし昔の内親王様がたにもそうした例は幾つもあったことで、御自分の御意志でもなく、運命に従って皆そうおなりになったのでございますから、何もあなた様お一方が世間から批難されるはずもないのでございます。これほどのお方のお志をお退けになりますのは、あまりにも御幼稚なことと申すほかはございません

ん。女性の方でも独立して行けぬことはないと思召すでしょうが、実際問題になりますと、御自身をお護りまもになることと、経済的のことで御苦労ばかりがどんなに多いかしれません。それよりも十分大事に尊重申される御良人ごりょうじんにお助けられになってこそ、あなた様の御天分も十分に発揮させることができるのでございます。どうかそのお心におなりくださいませ」

大和守はまた、

「あなたたちが宮様へよく御会得えとくのゆくようにお話し申し上げないのが悪いのです。そうかというとまたこうしたことに立ち至る最初の動機などはあなたがたの不注意でお起こしになったりし

て」

と少将や左近を責めた。

女房が皆集まって来て口々にお促しするのに御反抗がおできに
ならないで、きれいな色のお召し物などをお着せかえ申したりす
るままに宮はなっておいでのなるのであるが、切り捨ててしまい
たく思召すお髪ぐしを後ろから前へ引き寄せてごらんになると、それ
は六尺ほどの長さで、以前よりは少し量が減っていても、他の者
の目にはやはりきわめておみごとにみえるのであるが、御
自身では非常に衰えてしまった、もう結婚などのできる自分では
ない、いろいろな不幸にむしばまれた自分なのだからとお思い続

けになって、お召しかえになった姿をまたそのまま横たえておしまになった。

「時間が違ってしまふ。夜がふけてしまふだろう」

などと言つて、お供をする人たちは騒いでいた。時雨しぐれがあわただしく山莊を打つて、全体の気分が非常に悲しくなつた。

上りにし峰の煙に立ちまじり思はぬ方になびかずもがな

とお口ずさみになつたとおりに宮は思召すのであるが、そのころは鋏刀はさみなどというものを皆隠して、お手ずから尼におなりにな

るようなことのないように女房たちが警戒申し上げていたから、そんなふうにお騒ぎをせずとも、惜しく尊重すべき自分でもないものを、しいて尼になってみずからを清くしようとも思わず、すればかえって人の反感を買うにすぎないことも知っているのであるから、と思召して宮は御本意を遂げようともあそばさないのである。女房は皆移転の用意に急いで、お櫛箱ぐしばこ、お手箱、唐櫃からびつその他のお道具を、それも仮の物であつたから袋くらいに皆詰めてすでに運ばせてしまったから、宮お一人が残っておいでになることもおできにならずに、泣く泣く車へお乗りになりながらも、あたりばかりがおながめられになって、こちらへおいでになる時に、

御息所みやすどころが病苦がありながらも、お髪ぐしをなでてお繕いして車からお下ろおししたことなどをお思い出しになると、涙がお目を暗くばかりした。お護まもり刀とともに経の箱がお席わきの脇へ積まれたのを御覧になつて、

恋しさの慰めがたき形見にて涙に曇る玉の箱かな

とお歌いあそばされた。黒塗りのをまだお作らせになる間がなくて、御息所が始終使っていた螺鈿らでんの箱をそれにしておありになるのである。御息所の容体の悪い時に誦経ずきようの布施として僧へお出

しになった品であつたが、形見に見たいからとまたお手もとへお
取り返しになったものである。浦島の子のように箱を守ってお帰
りになる宮であつた。

一条へお着きになると、ここは悲しい色などはどこにもなく、
人が多く来ていて他家のようになっていた。車を寄せてお下り^おに
なろうとする時に、御自邸という気がされない不快な心持ちにお
なりになって、動こうとあそばさないのを、あまりに少女らしい
ことであると言って女房たちは困っていた。大將は東の対の南の
ほうの座敷を仮に自身の使う座敷にこしらえて、もう邸^{やしき}の主人の
ようにしていた。

三条の家では、だれもが、

「急に別なお家と別な奥様^{うち}がおできになったとはどうしたことでしょう。いつごろから始まった関係なのでしょう」

と言って驚いていた。多情な恋愛生活などをしなかった人は、こうした思いがけぬことを実行してしまうものである。しかしだれも以前からあった関係をはじめて公表したとと解釈して、まだ宮のお心は結婚に向いていぬことなどを想像する人もない。いずれにもせよ宮の御ために至極お気の毒なことばかりである。

御結婚の最初の日、の儀式が精進物のお料理であることは縁起の

よろしくなく見えることであつたが、お食事などのことが終わつて、一段落のついた時に、夕霧はこちらへ来て宮の御寢室への案内を、少将にしいた。

「いつまでもお変わりにならぬ長いお志でございますなら、今日明日だけをお待ちくださいませ。もとのお住居へお帰りになりましてまたお悲しみが新しくなりまして、生きた方のようにでもなく泣き寝におやすみになったのでございます。おなだめいたしましてもかえってお恨みになるのでございますから、私どももその苦痛をいたしたくございません。殿様のことを宮様に申し上げることはできないのでございます」

と少将は言う。

「変なことではないか、そうめい聡明な方のように想像していたのに、こんなことでは幼稚なところの抜けぬ方と思うほかはないではないか」

夕霧が自分の考えを言って、宮のためにも、自分のためにも世間の批議を許さぬ用意の十分あることを説くと、

「それはそうでございますが、ただ今ではお命がこのお悲しみでどうかおなりになるのではないかということだけを私どもは心配いたしております、そのほかのことは何も考えられないのでございます。殿様、お願いでございますから、しいて御無理なこ

とはあそばさないでくださいませ」

と少将は手をすり合わせて頼んだ。

「聞いたことも見たこともないお取り扱いだ。過去の一人の男ほども愛していただけない自分が哀れになる。世間へも何の面目があると思う」

失望してこう言う夕霧を見てはさすがに同情心も起こった。

「聞いたことも見たこともないと申しますことは、あなた様のあまりにお早まりになった御用意のことでございます。道理はどちらにあると世間が申すでございますようか」

と少し少将は笑った。こんなふうには強く抵抗をしてみても、今

はよその人でなく主人と召使の関係になっっている相手であるから、拒み続けることはさせないで、少将をつれて、おおよその見当をつけた宮の御寢室へはいって行つた。宮はあまりに思いやりのない心であると恨めしく思召されて、若々しいしかただと女房たちが言つてもよいという気におなりになつて、内蔵うちぐらの中へ敷き物を一つお敷かせになつて、中から戸に錠をかけてお寝やすみになつた。しかもこうしておられることもただ時間の問題である、こんなふうにも常規を逸してしまつた人は、いつまで自分をこうさせてはおくまいと悲しんでおいでになつた。大將は驚くべき冷酷なお心であると恨めしく思ったが、これほどの抵抗を受けたからと

いって、自分の恋は一步もあとへ退くものではない、必ず成功を見る時が来るのであるというこんな自信を持ってこの夜を明かすのであって、溪^{たに}を隔てて寝るという山鳥の夫婦のような気がした。ようやく明けがたになった。こうして冷淡に扱われた顔を皆に見せることが恥ずかしくて大将は出て行こうとする時に、

「ただ少しだけ戸をおあけください。お話したいことがあるのですから」

としきりに望んだがなんらの反応も見えない。

「うらみわび胸あきがたき冬の夜にまたさしまさる関の岩かど

言いようもない冷たいお心です」

と言って、それから泣く泣く出て行つた。

大將は六条院へ来て休息をした。花散里夫人が、はなちるさと

「一条の宮様と御結婚なすつたと太政大臣家あたりではお噂うわさしているようですが、ほんとうのことはどんなことなのでしょう」

とおおように尋ねた。御簾みすに几帳きちようを添えて立ててあつたが、横から優しい継母の顔も見えるのである。

「そんなふううわさに噂うわさもされるでしょう。亡なくなられた御息所みやすどころは、最初私が申し込んだころにはもつてのほかのことのように言われたものですが、病気がいよいよ悪くなったところに、ほかに託される

人のないのが心細かったのですか、自分の死後の宮様を御後見するようというような遺言をされたものですから、初めから好きだった方でもあるのですから、こういうことにしたのですが、それをいろいろに付会した噂もするでしょう。そう騒ぐことでないことを人は問題にしたがりますね」

と夕霧は笑って、

「ところが御本人はまだ尼になりたいとばかり考えておいでになるのですから、それもそうおさせして、いろいろに続き合った面倒な人たちから悪く言われることもなくしたほうがよいとは思われますが、私としては御息所の遺言を守らねばならぬ責任感が

あつて、ともかくも形だけは私が良人おっとになつて同棲どうせいすることにしましたのです。院がこちらへおいでになりました時にもお話のついでにそのとおりに申し上げておいてください。堅く通して来ながら、今になつて人が批難をするような恋を始めるとはけしからんなどとお言いにならないかと遠慮をしていたのですが、實際恋愛だけは人の忠告にも自身の心にも従えないものなのですからね」
とも忍びやかに言うのだった。

「私は人の作り事かと思つて聞いていましたが、そんなことでもあるのですね。世間にはたくさんあることですが、三条の姫君がどう思つていらつしやるだろうかとおかしいそうですよ。今まで

あんなに幸福だったのですから」

「可憐かれんな人のようにお言いになる姫君ですね。がさつな鬼のような女ですよ」

と言つて、また、

「決してそのほうもおろそかになどはいたしませんよ。失礼ですがあなた様御自身の御境遇から御推察なすってください。穏やかにだれへも好意を持って暮らすのが最後の勝利を得る道ではございませんか。嫉妬しと深いやかましく言う女に対しては、当座こそ面倒だと思つてこちらにも慎むことになるでしょうが、永久にそうしていられるものではありませんから、ほかに対象を作る日になる

と、いつそうかれはやかましくなり、こちらは倦怠けんたいと反感をその女から覚えるだけになります。そうしたことで、こちらの南の女王の態度といい、あなた様の善良さといい、皆手本にすべきものだとは私は信じております」

と継母をほめると、夫人は笑って、

「物の例にお引きになればなるほど、私が愛されていない妻であることが明瞭めいりょうになりますよ。それにしましてもおかしいことは、院は御自身の多情なお癖はお忘れになったように、少しの恋愛事件をお起こしになるとたいへんなことのようにお訓さとしになろうとしたり、蔭かげでも御心配になったりするのを拝見しますと、賢がる

人が自己のことを棚たなに上げているということのような気がしてな
りませんよ」

こう花散里夫人が言った。

「そうですよ。始終品行のことで教訓を受けますよ。親の言葉が
なくても私は浮気うわきなことなどをする男でもないのに」

大將は非常におかしいと思うふうであつた。

院のお居間へも来た大將を御覧になって、院は新事実を知つて
おいでになつたが、知つた顔を見せる必要はないとしておいでに
なつて、ただ顔をながめておいでになるのであつた。それは非常
に美しく、今が男の美の盛りのような夕霧であつた。今問題に

なっているような恋愛事件をこの人が起こしても、だれも当然のことと認めてしまふに違いないと思召された。鬼神でも罪を許すであろうほどな鮮明な美貌びぼうからは若い光と匂においが散りこぼれるようである。感情にまだ多少の欠陥のある青年者でもなく、どこも皆完全に発達したきれいな貴人であると院は御覧になつて、問題の起こるのももつともである。女でいてこの人を愛せずにおられるはずもなく、鏡を見てみずから慢心をせぬわけもなからうとわが子ながらも思いになる院でおありになつた。

昼近くなつて大將は三条の家へ歸つたのであつた。家へはいるともうすぐに何人もの同じほどの子供たちがそばへまつわりに来

た。夫人は帳台の中に寝ていた。大將がそこへ行っても目も見合
わせようとしない。恨めしいのであろう、もったもである夕霧
も知っているのであるが、氣にとめぬふうをして夫人の顔の上
にかかった夜着の端をのけると、

「ここをどこと思っておいになったのですか。私はもう死んで
しまいましたよ。平生から私のことを鬼だと言いになりますか
ら、いっそほんとうの鬼になろうと思つて」

と夫人は言つた。

「あなたの気持ちは鬼以上だけれど、あなたの顔はそうでないか
ら私はきらいになれないだろう」

何一つやましいこともないようにこんな冗談じようだんを言う良人おっとを夫人は不快に思つて、

「美しい恋をする人たちの中に混じつて生きていられない私ですから、どんな所でも行つてしまいます、もうあなたの念頭になぞ置かれたくない。長くいっしょにいたことすら後悔しているのですから」

と言つて、起き上がった夫人の愛嬌あいきやうのある顔が真赤まっかになつていて一種の魅力をもっていた。

「子供らしく始終腹をたてる鬼だから、もう見なれて怖ろおそしい気はしなくなつた。少し恐ろしいところを添えたいね」

と良人が冗談事じょうたんごとにしてしまおうとするのを、

「何を言っているのですか。おとなしく死んでおしまいなさいよ。私も死にますよ。いろんなことを聞いているとますますあなたがいやになりますよ。置いて死ねばまたどんなことをなさるか
と気がかりだから」

と腹をたてるのであるが、ますます愛嬌の出てくる夫人を夕霧は笑顔えがおで見ながら、

「近くで見るのがいやになっても、私の噂を無関心には聞かないでしょう。あなたはどんなに二人の宿縁の深いかを知らすために、私を殺して自分も死のうというのですね。二人の葬儀をいつ

しよにしてもらおうというような約束は前にしてあつたのだから
ね」

大將はまだ夫人の嫉妬しつとに取り合わないふうをして、いろいろに
すかしたり、なだめたりしていると、若々しく単純な性質の夫人
であるから、良人の言葉はいいかげんな言葉であると思ひながら
も機嫌きげんが直つてゆくのを、哀れに思ひながらも、大將の心は一条
の宮へ飛んでいた。あちらも意志の強いばかりの女性とはお見え
にならぬが、やはり自分との結婚を肯定することはできずに、尼
にでもなつておしまいになれば、自分の不名誉であると思うと、
当分は毎夜あちらに行つていねばならぬとあわただしい気がし

て、日の暮れていく空をながめても、まだ今日でさえお返事をくださらないではないかと煩悶はんもんされた。昨日から今日へかけて何一つ食べなかった夫人が夕食をとったりしていた。

「昔から私はあなたのために、どれほどの苦勞をしたことだろう。大臣が冷酷な処置をおとりになったから、失恋男とだれにも言われるのを我慢して、あちこちからある縁談を皆断わって、すべて棄権をしてしまっていたようなことは女だってそうはできないことだと皆言いましたよ。どうしてそんなにしていられただろうと、自分ながら若い時の自尊心を認めないではいられないのですからね。今のあなたは私をあくまで憎んでいても、愛すべき人

たちが家の中いっぱいにいるのだから、あなた一人の問題ではなくなつたような現在に、軽々しい挙動はできないではありませんか。よく見ていてください。どんなに変わらぬ愛を持っている私であるかを、長い将来に見てください。命だけではあなたとさえ引き離されることがあるでしょうがね」

こんな話になつて大将は泣き出した。夫人も昔のことを思い出すと、あんなにもして周囲に打ち勝つて育ててきた恋から夫婦になつてゐる自分たちではないかと、さすがに宿縁の深さも思われるのであつた。畳み目の消えた衣服を脱ぎ捨てて、ことにきれいなものを幾つも重ね、たきもの薰香で袖をそで燻くすべることもして、化粧もよくし

た良人が出かけて行く姿を、灯ひの明りで見ていると涙が流れてきた。夕霧の脱いだ単衣ひとえの袖を、夫人は自分の座のほうへ引き寄せ、

「馴なるる身を恨みんよりは松島にあまの衣にたちやかへまし

どうしてもこのままでは辛抱しんぼうができない」

と独言ひとりごとするのに夕霧は気づくと、出かける足をとめて、

「ほんとうに困った心ですね。」

松島のあまの濡衣ぬれぎぬ馴れぬとて脱ぎ変へつてふ名を立ためや

は」

と言った。急いだからであろうが平凡な歌である。

一条ではまだ前夜のまま宮が内蔵くらからお出にならないために、女房たちが、

「こんなふうについておいでになりましたは、若々しい、もののおわかりにならぬ方だという評判も立ちましょうから、平生のお座敷へお帰りになりました、そちらでお心持ちを殿様の御了解なさいますようにお話しあそばさばよろしいではござ

いませんか」

と言うのを、もつともなことに宮もお思いになるのであるが、世間でこれからの御自身がお受けになる譏そしりもつらく、過去のあつころにその人に好意を持つておいでになつた御自身をさえ恨めしく、そんなことから母君を失つたとお考えになると最もいとわしくて、この晩もお逢あいにはならなかつた。

「あまりに、御冷酷過ぎる」

こんな気持ちをいろいろに言つて取り次がせて夕霧はいた。女房たちも同情をせずにおられないのであつた。

「少しでも普通の人らしい気分が帰ってくる時まで、忘れずにい

てくだすったならとおっしゃるのでございます。母君の喪中だけはほかのことをいっさい思わずに謹慎して暮らしたいという思召しが濃厚でありあそばす一方では、知らぬ者がないほどにあなた様のことが世間へ知れましたのを残念がっておいでになるのでございます」

「私の愛は噂うわさとか何とかいうものに左右されない絶大なものなのだがね。そんなことが理解していただけないとは苦しいものだ」

と大将は歎息して、

「普通にお居間のほうへおいでになれば、物越しで私の心持ちをお話しするだけにとどめて、それ以上のことはまだいつまでも

待っていていいのです」

同じようなことをまた取り次がせるのであったが、

「弱いものがこんなに悲しみに疲れております際に、しいていろいろなことをおっしゃるのが非常にお恨めしく思われるのでございます。人が見てどう私が思われることでしょう。その一部は私の不幸なせいでもあるでしょうが、あなた様がお一人ぎめをあそばしたからだとこれを思います」

とまた御抗弁になった。まだ親しもうとあそばすふうはない。

そうは言っても、いつまでも真の夫婦になりえないことは、人の口から世間へも伝わるであろうから恥ずかしいと、この女房たち

に對してさえきまり悪く思う大将であつた。

「實際のことは宮様の御意志どおりの關係にとどめるにしても、この状態はあまりに変則だ。またそうであるからといって、私が断然来なくなつたら、宮様はどういう世評をお取りになるだろう。あまりに人生を悲觀なされ過ぎて、御幼稚な態度をお改めにならないのを私は宮様のために惜しむ」

などと大将が責めるのに道理があるように少将は思い、また夕霧の様子には氣の毒で見えておられぬところがあつて、女房たちが通つて行く出入り口にしてある内蔵の北の戸から大将を入れた。ひどいことをする恨めしい人たちであると宮は女房をお思ひにな

り、こうしてだれの心も利己的になるのであるから、これ以上のことを女房たちからされないものでもないとお考えになると、その人ら以外に頼む者のない今の御境遇をかえすがえす悲しく思いいになった。男は宮のお心の動かねばならぬようにして多くささやくのであるが、宮はただ恨めしくばかりお思いいになって、この人に親しみを見いだそうとはあそばさない。

「こんなふうにあらん限りの侮蔑ぶべつを加えられております私が非常に恥ずかしくて、あるまじい恋をしましたが初めの自分を後悔いたしますが、これは取り返しうるものではありませんし、あなた様のためにももうそれはしてならないことです。ですからもう

御自分はどうでもよいという徹底した弱い心におなりなさい。思うことのかなわない時に身を投げる人があるのですから、私のこの愛情を深い水とお思いになって、それへ身を捨てるとお思いになればよいと思います」

と夕霧は言った。単衣ひとえの着物にお身体からだを包むようにして、ほかへお見せになる強さといっては声を出してお泣きになることよりおできにならないのも、あくまで女らしくお気の毒なのをながめていて、なぜこうであろう、こんなにまで自分をお愛しになることが不可能なのであろうか、どんなに許しがたく思う人といっても、これほどの志を見ていては自然に心のゆるんでくるものであ

るが、岩や木以上に無情なふうをお見せになるのは、前生の約束がそうであるためで、自分に憎悪ぞうおをお持ちにならねばならぬ運命を持つておいでになるのではなからうかと、こんなことを思った時から大將はあまりなお扱いに憤りに似た気持ちが起こって、三条の夫人が今ごろどう思っているかと考えだすと、単純な幼心に思い合った昔のこと、近年になつて望みがかない、同棲どうせいすることのできて以来の信頼し合つた夫婦の情味などが思われて、自身の上始めたことではあるが、この恋が味気なくなつて、もうしいて宮の御機嫌きげんをとろうとも努めずに歎き明かした。こんなみじめなことであつたり出で行つたりすることもきまり悪くこの人は思つ

て、今日はこちらにとどまっていることにして落ち着いているのにも、宮は反感がお持たれになって、いよいよといふうをお見せになることが増してくるのを、幼稚なお心の方であると、恨めしく思いながらも哀れに感じていた。蔵くらの中も別段細かなものがたくさん置かれてあるのでなく、香の唐櫃からびつ、お置き棚だななどだけを体裁よくあちこちの隅すみへ置いて、感じよく居間に作って宮はおいでになるのである。中は暗い気のする所へ、出たらしい朝日の光がさして来た時に、夕霧は被かいでおいになる宮の夜着の端をのけて、乱れたお髪ぐしを手でなで直しなどしながらお顔を少し見た。上品で、あくまで女らしく艶えんなお顔であった。男は正しく装って

いる時以上に、部屋の中での柔らかな姿が顔を引き立ててきれいに見えた。柏木^{かしわぎ}が普通の風采^{ふうさい}でしかないのにもかかわらず思い上がり切っていて、宮を美人でないと思うふうを時々見せたことを宮は思い出しになると、その当時よりも衰えてしまった自分をこの人は愛し続けることができないであろうとお考えられになつて、恥ずかしくてならぬ気があそばされるのであつた。

宮はなるべく樂觀的にものを考えることにお努めになつてみずから慰めようとしておいでになるのであつた。ただ複雑な関係になつて、あちらへもこちらへも済まぬわけになることを苦しくお思ひになるのと、おりが母君の喪中であることによつてこうした

冷やかな態度をおとり続けになるのである。

大将の手水ちようずや朝餉あさげの粥かゆが宮のお居間のほうへ運ばれた。この際に喪の色を不吉として、なるべく目につかぬようにこの室の東のほうには屏風びようぶを立て、中央の室へやとの仕切りの所には香染めの几帳きちようを置いて、目に立つ巻き絵物などは避けた沈じんの木製の二段の棚たななどを手ぎわよく配置してあるのは皆大和守やまとのかみのしたことであつた。派手はでな色でない山吹色やまぶき、黒みのある紅、深い紫、青鈍あおにびなどに喪服を着かえさせ、薄紫、青朽葉くちばなどの裳もを目だたせず用いさせた女房たちが大将の給仕をした。今まで婦人がただけのお住居すまいであつて、規律のくずれていたのを引き締めて、少数の侍を巧みに使い

不都合のないようにしているのも、皆一人の大和守が利巧りこうな男だからである。こうして思いがけず勢力のある宮の御良人ごりょうじんがおできになったことを聞いて、もとは勤めていなかった家司けいしなどが突然現われて来て事務所に詰め、仕事に取りかかっていた。

実質はともかくも、この家の主人らしい生活を大将が一条で始めている数日間を、三条の夫人はもう捨てられ果てたもののように見て、これほど愛をことごとく新しい人に移すこともしないであろうと信賴していたのは自分の誤解であつた、忠実であつた良人がほかに恋人のできた時は、愛の痕跡こんせきも残さず変わってしまうものだと言うつのは嘘うそでないと、苦しい体験をはじめてすると

いう気もしてこの侮辱にじつと堪えていることはできないことであると思つて、父の大臣家へ方角除けよに行くと言つて邸やしきを出て行つた。女御にようぎが実家に歸つてゐる時でもあつたから、姉君にも逢あつて、悩ましい気持ちの少し紛らすこともできた雲井くもいの雁夫人かりは、平生のようにすぐ翌日に邸へ歸るようなこともせず父の家の客になつてゐた。これはすぐに左大将へも聞こえて行つた。そんなことがあるようにも予感されたことである、はげしい性質の人であるからと大将は思つた。大臣もまたりっぱな人物でありながら大人らしい寛大さの欠けた性格であるから、一徹に目にもものを見せようとされないものでもない、失敬である、もう絶交すると

いような態度をとられて、家庭の醜態が外へ知られることになつてはならぬと驚いて、三条へ歸つて見ると、子供は半分ほどあとに残されているのであつた。姫君たちと幼少な子だけを夫人はつれて行つたのである。父を見つけて喜んでまつわりに来る子もあれば、母を恋しがって泣く子もあるのを、大将は心苦しく思つた。手紙をたびたびやつて迎えの車を出すが、夫人からは返事もして来なかつた。こうして妻に意地を張られるようなことは、自分らの貴族の間にはないことであるがと、うとましく思いながらも、大臣へ対しての義理を思つて、日の暮れるのを待つて自身で夕霧は迎えに行つた。

「寢殿にいらっしゃいます」

ということで、平生行つて使つてゐる座敷のほうには女房だけがいた。男の子供たちだけは乳母めのとに添つてここにいた。

「今さら若々しい態度をとるあなたではありませんか。かわいい人たちをあちらこちらへ置きはなしにして、自身は寢殿でお姫様に歸つた気でいられるあなたの気持ちは解釈に苦しむ。私への愛情がそんなふうには少ないとは私にもわかつているのですが、昔からあなたにばかり惹ひかれる心を私は持つてゐるし、今ではおおぜいのかわいそうな子供ができてゐるのですから、二人の結合のゆるむことはないと思つてゐたのに、ちよつとしたことにこたわつ

て、こんな扱いを私になさることはいいことだろうか」

取り次ぎによって夕霧はこう妻を責めた。

「もうすべてのことがお気に入らないものになってしまったので
すから、お困りになる私の性質は今さら直す必要もないと思いま
す。かわいそうな子供たちだけを愛してくださればうれしく思ひ
ます」

と夫人は返事をさせた。

「おとなしい御挨拶だ。あいさつ結局はだれの不名誉になることとお思ひ
になるのだろう」

と言って、しいて夫人の出て来ることも求めずに、この晩は一

人で寝ることにした。どちらつかずの境遇になったと思ひながら、子供たちをそばへ寝させて大將は女二にょにの宮みやの御様子も想像するのであった。どんなにまた煩悶はんもんをしておいでになる夜であろうなどと考えると苦しくなつて、こんな遣やる瀬せない苦しみばかりをせねばならぬ恋というものをなぜおもしろいことに人は思うのであらうと、懲りてしまいそうな氣もした。夜が明けた時に、

「こんなことを若夫婦のように言い合っているのも恥ずかしいことですから、だめならだめとあきらめますが、もう一度だけもとどおりになつてほしいという私の希望をいれたらどうですか。三条にいる小さい人たちもかわいそうな顔をして母を恋しがつてい

ましたが、選^よって残しておいになったのにはそれだけの考えがあるのでしょうか、あなたに愛されない子供達を私の手でどうにか育てましょう」

とまた多少威嚇^{いかく}的なことを夫人へ言ってやった。一本気なこの人は自分の生んだ子供たちまでもほかの家へつれて行くかもしれぬという不安を夫人は覚えた。

「姫君を本邸のほうへ帰してください。顔を見に来ることもこうしたきまりの悪い思いを始終しなければならぬことですから、たびたびはようしません。あちらに残っている子供たちも寂しくてかわいそうですから、せめていっしょに置いてやりたいと思

ます」

とまた大将は言つてよこした。そうしてから小さくてきれいな顔をした姫君たちが父のいる座敷へつれられて来た。夕霧はかわいく思つて女の子たちを見た。

「お母様の言うとおりになつてはいけませんよ。ものの判断のできない女になつては悪いからね」

などと教えていた。

大臣は娘と婿のこの事件を聞いて外聞を悪がっていた。

「しばらく静観をしているべきだった。大将にも考えがあつてしていたことだろうからね。婦人が反抗的に家を出て来るようなこ

とは軽率なことに見られて、かえって人の同情を失ってしまう。
しかしもうそうした態度を取りかけた以上は、すぐに負けて出て
はならない。そのうちに先方の誠意のありなしもわかることだか
ら」

と娘に言って、一条の宮へ蔵人少将くろうどを使いにして大臣は手紙を
お送りするのであった。

契ちぎりあれや君を心にとどめおきて哀れと思ひ恨めしと聞く

無関心にはなれませんが因縁があるのでございますね。

この手紙を持って、少将はずんずん宮家へはいつて来た。南の縁側に敷き物を出したが、女房たちは応接に出るのを気づらく思った。まして宮はわびしい気持ちになっておいでになった。この人は兄弟の中で最も風采ふうさいのよい人で、落ち着いた態度で邸やしきの中を見まわしながらも、亡なき兄のことを思い出しているふうであった。

「始終伺っている所のような気になって私はいるのですが、そちらでは親しい者とお認めくださらないかもしれませんね」
などと皮肉を少し言う。大臣への返事をしにくく宮は思召して、

「私にはどうしても書かれない」

こうお言いになると、

「お返事をなさいませんと、あちらでは礼儀のないようにお思いになるでございましょうし、私どもが代わって御挨拶をいたしておいてよい方でもございせんから」

女房たちが集まって、なおもお書きになることをお促しすると、宮はまずお泣きになって、御息所みやすどころが生きていたなら、どんなに不愉快なことで自分の今日のことを思っても、身に代えて罪は隠してくれるであろうと母君の大きな愛を思い出しながら、お書きになる紙の上には、墨よりも涙のほうが多く伝わって来てお字

が続かない。

何故^{なにゆゑ}か世に数ならぬ身一つを憂^うしとも思ひ悲しとも聞く

と実感のままお書きになり、それだけにして包んでお出しになった。少将は女房たちとしばらく話をしていたが、

「時々伺っている私が、こうした御簾^{みす}の前にお置かれすること
は、あまりに哀れですよ。これからはあなたがたを友人と
思って始終まいますから、お座敷の出入りも許していただければ、
今日までの志^{むく}が酬^{むく}いられた気がするでしょう」

などという言葉を残して蔵人少将は帰った。

こんなことから宮の御感情はまたまた硬化していくのに対して、夕霧が煩悶はんもんと焦躁しやうそうで夢中になっている間、一方で雲井の雁夫いかりのすけ人の苦悶くもんは深まるばかりであつた。こんな噂うわさを聞いている典侍は、自分を許しがたい存在として嫉妬しつとし続ける夫人にとって今度こそ悔りがたい相手が出現したではないかと思つて、手紙などは時々送っているのであつたから、見舞いを書いて出した。

数ならば身に知られまし世の憂うさを人のためにも濡ぬらす袖そでかな

失敬なというような気も夫人はするのであつたが、物の身にしむころで、しかも退屈な中にいてはこれにも哀れは覺えないでもなかつた。

人の世の憂きを哀れと見しかども身に代へんとは思はざりしを

とだけ書かれた返事に、典侍はそれとおりに思うことであろうと同情した。

夫人と結婚のできた以前の青春時代には、この典侍だけを隠れ

た愛人にして慰められていた大将であつたが、夫人を得てからは来ることもたまさかになつてしまった。さすがに子供の数だけはふえていった。夫人の生んだのは、長男、三男、四男、六男と、長女、二女、四女、五女で、典侍は三女、六女、二男、五男を持っていた。大将の子は皆で十二人であるが、皆よい子で、それぞれの特色を持つて成長していった。典侍の生んだ男の子は顔もよく、才もあつて皆すぐれていた。三女と二男は六条院の花散里はなちるさと夫人が手もとへ引き取つて世話をしていた。その子供たちは院も始終御覧になつて愛しておいでになつた。それはまったく理想的にいつているわけである。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
